

特集にあたって

法政大学工学部 浦谷 規

新学期の始まる4月号は、昨年の特集「大学入試と大学問題」にひきつづき、「理工系大学院教育の新潮流」の特集です。OR誌の読者諸氏は、数理モデルばかりでなく組織の基礎となる人材育成の制度としての最終機関である大学院の教育に関心をもたれていると考え、新しい大学院を企画運営されている錚々たる方々に執筆していただいた。ただし大学院教育の新しい流れは理工系に限らず最近進展しているが、本特集ではORに関係の深い5つの大学院の紹介でまとめることにした。

はじめに文部省の論客として有名な草原克豪氏に「大学院教育の新潮流」と題して大学院のかかえる問題とその改善すべき課題を、理工系ばかりでなく広く一般的に論じていただいた。現代社会が要求する大学院へのニーズとして、研究者養成ばかりでなく高度専門職業人の養成、職業人の再教育、国際化への対応、さらに基礎研究による国際社会への貢献等を明らかにしたうえで従来の大学院の問題点をカリキュラムと施設問題にしばって述べられている。問題点の改善策として本特集で紹介する大学院ばかりでなく多くの大学院の新基軸を制度、研究環境、教育内容の側面から大学院改革の趣旨が述べられている。草原氏の「大学の教育研究活動そのものが文化国家の証」という指摘は大学人に対する至言であろう。

北陸先端科学技術大学院大学の慶伊富永学長には、「独立大学院大学のスタート」と題して、国際的視点から独立大学院大学発足の経緯と展望を紹介していただいた。欧州統合を機に、ヨーロッパ型教育は従来のエリート主義、アカデミズム重視から、日本型実学重視への移行、研究資金の重点配分等の世界的大学改革の背景が述べられている。この世界的傾向を踏まえたうえで、先端科学技術大学院大学構想が紹介される。先端科学技術の分野を情報、新素材、バイオとし、新しい社会的ニーズに対応するため石川県と奈良県に、学部から独立した大学院大学の誕生の経緯とその目的が紹介される。また、発足後1年間の北陸先端科学技術大学院大学の経験と新しい試みが詳しく述べられている。

奈良先端科学技術大学院大学の櫻井洸学長の「奈良先

端科学技術大学院大学が開学して」では本年4月からの学生の受け入れをひかえ、情報科学とバイオサイエンスの将来の科学技術情報発信基地となるべく発足した大学院の抱負とその教育研究体制が詳しく述べられている。

総合研究大学院大学の廣田榮治副学長には、「総合研究大学院大学」と題して、その全く新しい組織と目的を説明していただいた。大学院修士課程終了者以上を大学共同利用機関で研究させる研究者養成を目的とし、既存の研究体制を横断的に活用する組織である。その自由な研究体制から今後のわが国の基礎研究の発展をにう大学院として期待される。

高森寛氏の「青山学院大学国際ビジネス専攻修士課程」では私学として国際化をにう職業人の再教育についての興味深い新しい試みを紹介していただいた。著名な外国人客員教授を多数招聘する寄附講座、国際ビジネス・シミュレーション、ファイナンシャル・トレーディング・システム、カーネギーメロン大学とのネットワーク等の時代の大きな流れをいち早く取り入れた教育体制は職業人のリフレッシュ教育にはふさわしいものとなっている。

最後に、森村英典氏の「社会人大学院の充実」では、筑波大学経営システム科学専攻は経営学、数理科学、計算機科学の3分野を融合的に教育研究し、21世紀における諸問題に挑戦する新しい大学院の期待と経験が述べられている。さらに、OR学会員の多数の教育スタッフをかかえる大学院として、大学院の新潮流に対するわが学会のとりくみ方も示唆されている。

以上の大学院教育の新潮流で、わが学会に関連する一部の紹介だけからでも、大学院は社会的ニーズばかりかアカデミズム的視点からも現在は1つの大きな変革期にあるといえよう。本特集を読まれた多くの方々が社会人のリフレッシュ教育に挑戦したり、研究体制の弾力化を利用して教育研究の新基軸を考えられることを期待している。そして、この大学院改革の今後の進展が、世界から求められているわが国の課題「創造的活動による21世紀への貢献」の基礎になることは間違いないものと思う。